

も 足立区立郷土博物館リニューアルオープン…P1 はい、文化財係です47 古墳時代の
じ 馬の歯…P2 お化け煙突60周年④職場で…P4

足立史談

第686号

2025年4月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集部
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

4月26日(土)11時

いよいよリニューアルオープン

足立区立郷土博物館



「美術博物館」へと生まれ変わる 博物館

1F ホール 美術資料を常設展で見られるホール
1F 企画展示室 美術資料にいっそう特化した展示
ケース仕様に全面改修

きたただけではなく、美術品の生まれる背景を区の歴史のなかに位置づけ、郷土史のストーリーとして紹介しています。歴史、民俗、美術史が優合して常設展示を創る、例を見ない形です。

二年四か月の休館を経て、郷土博物館はいよいよリニューアルオープンします。
今回は、開館から四〇年近くたつ博物館の建物と空調設備等をすべて改修することが目的のひとつでした。とくに空調は近年の暑さにも対応できる最新式の機械を入れ、妨害虫のためのくん蒸庫設備も、薬剤の切り替えに合わせたものを設置しました。
さらに、今回は、文化遺産調査で明らかになった、区内の美術資料を、いつでも観覧できるように、美術資料に特化した展示ケースも備えました。
美術品を陳列展示するコーナーがで

同時開催

千住・足立の

文化遺産 前期

香りたつ 琳派の美

4月26日～6月29日

日本最古の美術雑誌『國華』に特集された「千住・足立の文化遺産」で取り上げた資料のなから、琳派の作品を中心に紹介いたします。

新しくなった企画展示室で、足立区に香りたつ、琳派の美をご堪能ください。

リニューアルオープンのお知らせ

■一般公開

4月26日(土曜日)

午前11時より

■オープン記念無料公開

4月26日～5月6日

無料公開期間中、館内クイズラリー実施。クイズに答えた方にはプレゼントを差し上げます。

■休館日

月曜日、月曜日が祝日の場合、その翌平日。(4月28日は月曜休館、5月7日は振替休館となります。)

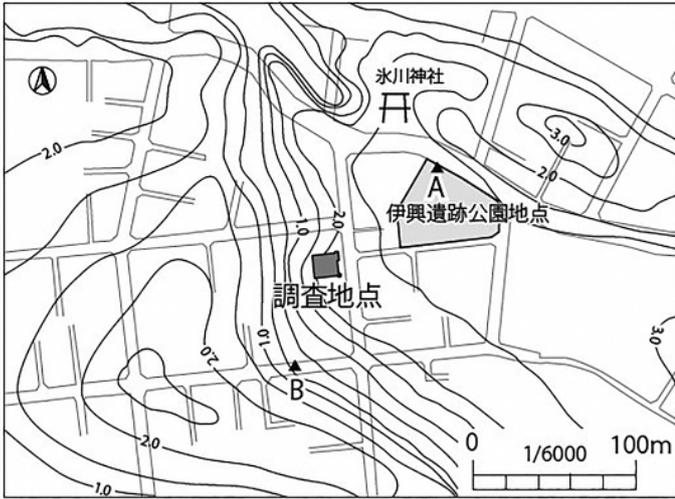
*図書室の利用を休止しています。

はい、文化財係です ④7 古墳時代の馬の歯



伊興・谷下(やじった)・狭間遺跡(以下、伊興遺跡と省略)は足立区東伊興1丁目から4丁目及び伊興本町1丁目から2丁目にまたがる範囲に所在する、足立区で最大の面積を誇る遺跡です。伊興遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡ですが、集落の形成は古墳時代初頭にはじまり、特に古墳時代中期に隆盛をみます。

今回、伊興遺跡で第4次調査が行われ、古墳時代の祭祀遺構と考えられる土坑から、馬の歯が発見されました。



第1図 調査地点位置図

今回はこの古墳時代の馬の歯についてご紹介します。

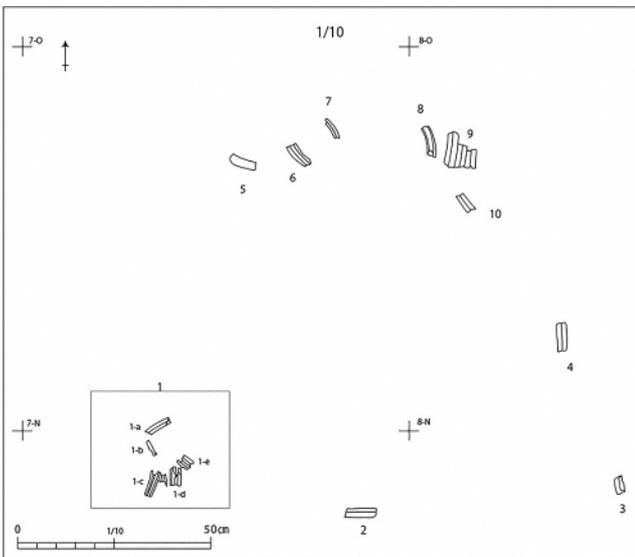
【第4次調査成果】

令和5年2月1日から3月24日までの期間で、第4次調査が実施されました。今回の発掘調査面積は210㎡で、遺跡範囲の中では北西端に近い箇所です。調査地点北北東側には「測の宮」とよばれる伊興氷川神社があり、北東側には伊興遺跡の中心と考えられる伊興遺跡公園が所在します。(第1図)

今回の調査範囲では、おもに古墳時代の遺構が確認されました。祭祀に関連するものと考えられます。遺構および包含層から出土した遺物は、破片点



第2図 第4次調査遺構全体図



第3図 馬の歯分布図

数にして土師器・須恵器10312点で、意図的に打ち欠いたような状態で出土するものが多く、1点ごとの平均重量はわずかに13.6gです。他にも土錘(どすい・漁網のおもり)などの土製品16点、白玉22点、石製模造品3点、馬の歯16点が確認されました。

【今回出土の馬の歯】

調査範囲北西側の2C号遺構(土坑)から、意図的に破砕された須恵器大甕・土師器大甕の破片などと共に、馬の歯が出土しました。(第2図) 馬の歯は、約130cm×100cmの範囲に集中していました。(第3図) 今回出土の馬の歯は白歯のみ16点で、すべて別の歯種であり、歯の遺存

状態や歯長・歯高のサイズから馬1体分で、推定年齢は3歳程度の若年馬と考えられます。(第4図) 馬の歯は、相伴遺物(同一の遺跡から発見されて、それぞれ関係があると推定される遺物)から古墳時代中期後葉〜後期(5世紀末〜6世紀)のものとして推定されます。これらの白歯の多くが、バラバラに散在していましたが、一部の歯は歯列通りに並んでいました。

このことから、おそらく馬の頭部が置かれ、もともと頭蓋骨・下顎骨もあつたものの長年の間に消失し、堅牢な白歯のみが残存したと考えられます。四肢骨については、頭蓋骨・下顎骨が消失したとすると、同じように消失し

たことも考えられ、はじめから存在しなかつたとは言いい切れません。

【馬の頭部が置かれた意味】

馬を儀礼や祭祀で扱う際には、その頭部を用いることが多いのですが、必ずしも頭のみとは言いい切れません。今回の調査範囲では、土師器や須恵器の大甕が故意に破碎され、それらがまとめて遺棄された状態で出土し、滑石製の白玉や石製模造品が確認されるなど、祭祀に関する推測される遺物が多数見つかっています。(第五・第六図)



第4図 今回出土の馬の歯

と考えられます。 今回の調査範囲は古墳時代の祭祀の場と考えられます。調査地点から西は地山であるシルト層面の標高が下がり、この地点は古墳時代においては水辺に張り出していて、馬を用いた水辺の祭祀が行われていたと考えられます。

【過去の調査での馬の出土】

過去の調査では、1992年の伊興遺跡公園地点の調査で、古墳時代の包含層から、成獣1体分の馬の骨盤が出土しています。しかし、出土状況から祭祀に使用されたような痕跡はありませんでした。

他にも1997年の伊興遺跡の下水道敷設工事による調査で、古墳時代



第5図 馬の歯と高坏脚部

奈良・平安時代初頭までの遺構から、7体分の馬の歯・骨が出土しています。これらには解体などにみられる骨の加工痕などはありませんでした。

1999年の調査では今回の調査地点より少し北東寄りの箇所、古墳時代中期前半の遺構から、1体分の第3切歯とみられる馬の歯が出土しています。この例は伊興遺跡では最古の馬の出土事例になります。

伊興遺跡以外では、伊興遺跡から南西に1キロほどの位置にある若宮八幡神社遺跡から、古墳時代後期から奈良・平安時代の包含層より、3〜4歳程度の馬1体分の歯と下顎骨が出土しています。



第6図 須恵器大甕破片

ご紹介した通り、今回の調査以前にも足立区内では馬の歯や骨の出土例はありましたが、今回のような明確な古墳時代の祭祀遺構での出土例は初めてになります。

古墳時代の馬の歯や骨の出土例は全国的にみると、あまり類例が多いものではありません。今回の発見は非常に重要なものと考えられます。

【伊興・谷下・狭間遺跡第4次調査速報展】

伊興・谷下・狭間遺跡第4次調査速報を開催中です。場所は伊興遺跡公園展示館2階展示室です。

皆様のご来館お待ちしております。(遺跡発掘調査員 上野未来)

とねり 日暮里・舎人ライナー
—見沼代親水公園駅 ミニ展示—

2025年度

「舎人の歴史 写真館」

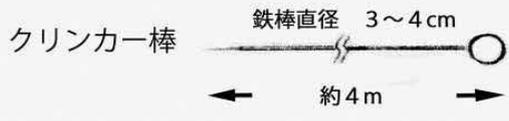
昭和40年(1965)頃の舎人の写真と、舎人の地に伝わる伝説、戦国武将、赤山街道の宿-舎人-で開かれた市について紹介します。

お化け煙突60年追録

④ 職場で

格和 宏典

■クリンカー落とし
ボイラー内での燃焼によって生じた灰の粒子が溶融固化し、加熱管や炉壁に付着し、燃焼効率の低下を招くなど弊害が大きい。ため、炉内が冷えた夜勤(三直)にクリンカー落としを行った。

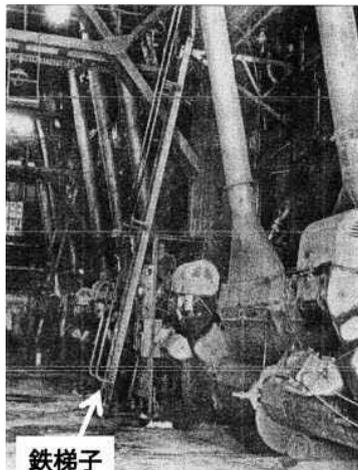


クリンカー棒と呼ぶ長さ約4m位の鉄棒で、缶裏から二人、ときには三人で、先棒がクリンカーに狙いを定め、「それ！」と掛け声で、あと棒に合図し、つつき落とすが、きつい作業だった。

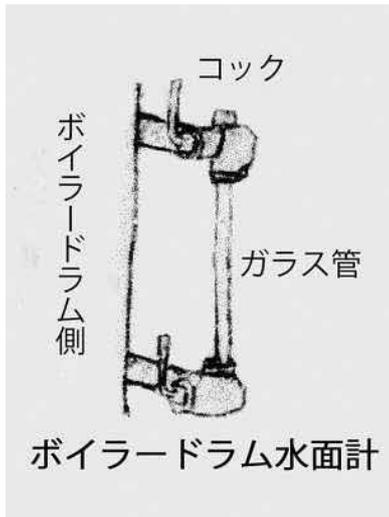
先輩が、「新入社員の頃、クリンカーがなかなか落ちなくて、『お前、中に入って落としてこい！』と言われたときは一瞬ビビったよ。観念して耐熱服を着て潜り込んだけど、熱いのなんの、まいったね。ハンマーでたたき落としてすぐ出てきたけど、二度とやりたかねえよ」と。筆者も同感。

■鉄梯子の滑り台
各種作業に使用するの、ボロ布を何枚も重ねて塗った「ボロ手」。形は、家庭で使用するナベつまみと同形。ボイラー上部で作業

が終わる、鉄梯子(昇降階段)を降りる際、手スリをボロ手でつかみ、両ヒジをまっすぐ伸ばした状態で滑り降りてくる。鉄梯子を歩いて降りるより早く、「アツ」という間に着地。こんなところ主任や総括者に見つかる。と、「あぶねえ真似すんじゃねえ！」と怒声が飛んでくる。でも、缶前は誰でもやってるし、主



鉄梯子 (昇降階段) ボイラー前面



任だって缶前のときやってたんじゃねえの。柳に風と受け流す度胸も出てきた。生意気な若造だった。

■水面計取り換え
独り立ちして一ヶ月もたないある日のこと、頭上で「パカツ」と音がした。見上げてみると異常がなさそう。

すると、隣の先輩缶前が大声で、「水面計を見てみる！」と。再び見上げると、水面計から蒸気らしきものが漏れている。

水面計の取り換えは実習のとき見ていただけ。腹をくくって当直主任に水面計取り換えを申し出た。

主任は、「カクちゃん初めてか。俺が手伝ってやるからやってみる」とのこと。主任の顔が仏様に見えるとはこのこと。主任の指導でおつかなびづくり作業をしていると「おめえそんなこっちゃあー丁前にやなねえぞ」ハッパをかけれながら何とか取り換えを完了した。

「俺が缶前の頃は、安全もへったくれもなかったんだ。むしろ、危ねえと思われることでも平気な顔でやるのが『かっこいい』って思われたもんだぜ。でもな、今は安全第一の時代だから、気を抜かずにやるんだよ」にこにこ顔で優しい言葉をかけてくれた。

■ソロバンは苦手
汽缶には、蒸気圧力計、炉内・煙道などの通風

量、各部の温度などの計器が取り付けられた計器盤があり、担当が定時に記録し、当直室で計算・集計していた。

新入社員研修で学んだときのこと、筆者はソロバンが出来ない。工業学校は計算尺でソロバンは使わない。シメシメと思っていたのに。最初、筆算でやっていたら指導員から「ソロバン使え！」と怒られ、最初の「ぱち ぱち ぱち」がしばらく経つと「パチパチパチ」、音が綺麗になってきた。慣れほど恐ろしいものはない。と思った次第。

■先輩のはなし
筆者は、詰所や社員浴場などで先輩の昔話を聞くのが好きだったが、今では考えられないようなものもあった。
TFさん(昭和二十四年入社)
・電力需要の減少が始まった頃、ようやく3〜4時間の仮眠が可能になったが、入社間もない我々は、床やグレーチング(鋼材を格子状に溶接した製品で、工場の歩行路や道路側溝の蓋などに使用する)にむしろを敷き、ぼろきれを枕にして寝た。

昭和二十八年入社の人ASさんも、缶裏の通路にむしろを敷いて寝た。とのこと。

・運転中や各種作業時に安全帽は一切使用しなかった。ましてや、安全帯など知る由もなし。また、履物は地下足袋で、作業靴が支給されたのは三十年代になってから。

元千住火力発電所所員